

海外水ビジネスの眼

陸地・海洋の水は、蒸発して大気中を上昇し雲になって、雨や雪として陸地・海洋に降下し還流する。また、陸地の水は、地表や地下から、河川を通じて海洋に流水となって還流する。水は、液体、固体、気体と、三相に姿を変えながら、地球の大気・陸地・海洋を循環している。

水が、生命の保持とともに、人間が農業や産業を営むために必須であるように、お金も、また人間が生活していくためには無くてはならないものである。お金は、古くから人間の経済活動に伴い利用され、財やサービスを提供する対価として用いられてきた。お金は、いつ

の世も、社会に共通かつ重要な価値の尺度を提供してきた。さらに、価値の交換手段でもあり、貯蔵手段でもあった。

地球全体に存在する水の量は14億立方キロメートルで変わらない。ところが、陸地の降水量は海洋の降水量より少なく、陸地の降水量は陸地の蒸発量より少ない。地球を循環している水のうち、人間が利用できる水の量は、陸地の降水量から蒸発量を差し引き、地表・地下の流量年間5万立方キロメートルに限られる。

一方、世に出回るお金の量は、経済が拡大するにつれて増えてきた。現代では、各国中央銀行が、一国の経済の規模や成長に見合うように金融政策によつ

て流通するお金の金利や量を調節している。ただし、近年は経済金融のグローバル化に拍車がかかり国境を越えて瞬時に移動する中、主要国が景気を下支えしようとして供給量を著しく拡大させてきたため、ややこしいことになっている。

国際的な取引では、外国との為替取引で代金の決済を行う。外国為替取引の通貨別シェアは、米ドルが圧倒的な取引量を誇っているが、今も、外国為替取引を主導するのはロンドンであり、イギリスの1日当たり最大為替取引額は3兆数千億ドルで世界の4割強と巨額である。

水とお金

つまり、水も、お金も、天下の回りものであって、水も、お金も、昼夜を問わず休むことなく、時時刻々、大量に地球上を巡り巡っている。そして、水は高いところから低いところへ流れ、お金は金利の低いところから高いところへと流れていく。

今年に入り、イギリスのBOEと米国のFRBを筆頭に、各国は、次々と政策金利を引き上げてきた。日本を除く先進各国は、インフレに歯止めをかけようと長年にわたる超低金利政策を見直してきた。すると、英米欧の利上げを背景に、

新興国から大量の投資資金が海外に流出して、現地通貨の価値が大幅下落してしまい、インフレが加速した。エネルギーや食料の価格の高騰に追い打ちをかけたのは、ロシアのウクライナ侵攻だった。

そんなこんなで、ただ同然に低い金利でお金を借りられるのは、今でも緩和政策が続いている日本だけである。水資源が豊富で恵まれていた日本では、水も、蛇口をひねれば出てくるし、水道料金は安くてあたりまえという感覚だ。しかし、世界を見回すと、お金の困っている国は多く、水を巡る競争や紛争も激烈を極めていく。

温暖化による水不足を背景に水の商品化が試みられている。米国では、シカゴ・マーカントイル取引所で、水の先物取引が始まっている。オーストラリアでは、マレー・ダーリング盆地を水源とする、農家のための大規模な水の市場ができていく。地主は河川の水を自由に売却でき、価格は作物価格や降水量予測により上下する。そこで水とお金は交差する。つまり、水も、お金も、世界で偏在が極端になったときや、流れが突然急な奔流となったとき、たいへん危険である。水も、お金も、清々と流れていく隅々まで行きわたって、淀むことなく円滑に循環することが、何よりも肝要だ。

(寿司好)